

2020年4月27日

2019年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類	・共同研究 (○) ・個人研究 ()	
研究代表者	国際学部 准教授 西村 めぐみ	
研究課題名	2019年度 共立女子大学 在学生の定量的及び卒業生の定性的分析 副題名: 在学生の学生生活の充実度・満足度に関する定量的分析及び Self Narrative Editing Worksheet (自分史記録) に基づく 卒業生のキャリアパスの定性的分析	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
北村 弥生	文芸学部 文芸学科 教授	Self Narrative Editing Worksheet (自分史記録) に基づいた本学卒業生のキャリアパスの追跡調査及びその分析
ジョシ アバイ	大東文化大学 経済学部 社会経済学科 准教授	社会学の観点から学生調査アンケート質問項目の作成・及び分析
研究期間	2019年4月1日 ～ 2020年3月31日	

研究実績の概要 (1)

本研究は、「在学生の学生生活の充実度・満足度に関する定量的分析 (以下、在学生の定量的分析)」及び「Self Narrative Editing Worksheet (自分史記録) に基づく卒業生のキャリアパスの定性的分析 (以下、卒業生の定性的分析)」という二部構成の分析をする研究であるため、以下では分析毎に記述をする。

研究目的

I 在学生の定量的分析: 心理学における「自己決定理論」に基づくアンケート調査を実施し、学業・就労・課外活動などから成る学生生活の充実度・満足度を決定する要因を計量経済学的手法を用いて分析し、明らかにすることを目的とする。

II 卒業生の定性的分析: 本学卒業生にとって、学生生活の充実度・満足度は、大学卒業後の就労経験についての〈語り・語り直し〉のなかにどのように構築され位置づけられるか、という課題を端緒として、卒業生 20 人を対象にインタビューおよびワークショップを行い定性的な分析を行うことを目的とする。

研究対象

I 在学生の定量的分析: 本学国際学部の研究代表者の授業を履修している 1-4 年生 約 90 名

II 卒業生の定性的分析:

2009 年から 2018 年に卒業し、現在何らかの労働形態で組織に就労している文芸学部卒業生約 20 名

研究方法

- I 在学生の定量的分析: 自己決定理論に基づき、学生の動機の内面化の状況・学生の動機の内面化に影響を与える外的環境(教員・家庭)を把握するための質問項目と学生の生活充実度(成績・主観的満足度)を把握する質問項目を載せたアンケートを作成し、アンケートの結果を、Path Analysis という手法を使って分析する。
- II 卒業生の定性的分析: ワークショップ(自分史編集)及びインタビュー(非構造化インタビュー)を行う。その模様は、IC3 レコーダとビデオで録音・録画し、音声トランスクリプション及び映像データを、Labov メソッド(Labov1972)に依拠してコーディング、エスノメソドロジーの手法(Goodwin2003)で分析する。

研究結果

I 在学生の定量的分析:

自己決定理論(図1)に基づけば、保護者による Autonomy Support (自律性支援)は、⇒学生の自律性・関係性・有能から成る Basic Psychological Need Satisfaction (基本的心理欲求)を満たし、基本的心理欲求の充足は⇒Perceived Competence (自己有能感)を高め、自己有能感の高まりは、⇒Relative Autonomy Index (相対自律性指数)で測る動機の内面化に繋がり、内面的動機の高まりは、⇒GPA の向上に繋がるはずである。

図1は、自己決定理論に基づき、学生を取り巻く環境と、動機の内面化が学生の成績(GPA)に与える効果を Path Analysis 分析をした実際の結果を示している。詳細は紀要に叙述するため省略するが、本学学生の場合、自己決定理論が途中までは当てはまるが、途中から自己決定理論から逸脱し、自己決定理論が主張する動機の内面化とは違う要因が GPA の向上に寄与することが分かった。本学学生の場合、保護者による Autonomy Support (自律性支援)は、学生の Basic Psychological Need Satisfaction (基本的心理欲求)を高め、さらに Perceived Competence (自己有能感)を高めることが分かった。ここまでは、自己決定理論の主張通りの道を辿っていたのだが、ここから理論から逸脱を開始する。自己有能感が高まると、自己決定理論では学生は学問の喜びを見出したり、学問を追求することの自分にとっての意味を見出したりする動機の内面化が起こるはずである。しかし、本学学生の場合、保護者の自律的支援を十分に受け、基本的心理欲求が満たされ、自己有能感が高まると、上述のような動機の内面化とは逆に、誰かに喜ばせようと勉学を頑張る、もしくは、頑張らなければいけない外部的圧力を感じて勉学を頑張る方向に向かってしまう傾向があることが分かった。さらに、自己決定理論が唱えるように、より内面的な動機を有することが良い結果(高 GPA)に繋がるのではなく、自己決定理論の初期段階の変数である保護者の自律的支援と、基本的心理欲求の充足が GPA の向上に繋がることが分かった。

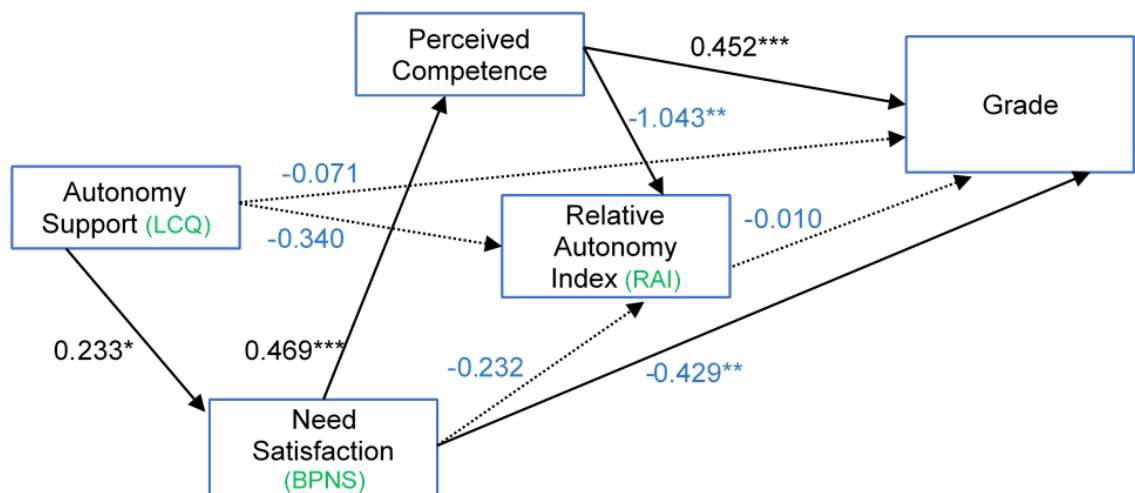


図1 自己決定理論の Path Diagram (Note: Solid Line: Statistically Significant Dotted Line: Statistically Significant)

II 卒業生の定性的分析:

学生生活の充実度(感)・満足度(感)は、大学卒業後の就労経験についての〈語り・語り直し〉のなかにもどのように構築され位置づけられるか、という視座から、卒業生 20 人からセルフ・ナラティブおよびワークシートが得られた。これに基づき記述されるエスノグラフィーの一部を要約すれば、以下 3 点のセルフ・ナラティブが挙げられる。

1) 組織社会化過程における学び直し、地位・評価向上の、〈専門スキル獲得〉のセルフ・ナラティブ
卒業生 20 人中、卒業後専門職に就いた者は 7 名おり、その内訳は、映像制作会社の音声編集技術担当から、テレビ局映像編集技術担当、高校教諭、IT 企業広報ディレクター、広告代理店広告制作ディレクター、漫画家、大手社会基幹産業におけるシステムエンジニアまで様々である。この 7 名から得た語りには特徴的だったのは、その専門性を就労後の組織社会化過程において改めて学びなおした、というイベントに対する〈語り〉である。この〈語り〉は、大学で学んだことが結局仕事の役に立たなかった、という言説としてではなくむしろ、「この道に関わって生きたい」という専門性に対する彼女たちの強い意欲が、日々の仕事における実践プロセスの過程に編み込まれる形で醸成・承認されてきたというストーリーとして語られたことに特徴がある。

2) 一般職就労者による〈ロック・クライミング〉のセルフ・ナラティブ
働き方改革によって、総合職・一般職という範疇づけに対する企業態度が取りざたされる昨今の潮流をいち早く察知して、自らの労働環境改善に取り組む一般職就労者ならでは語られうる経験のストーリーを 4 名の〈語り〉に見いだすことができた。「お茶汲み」制度の廃止を戦略的に上司にもちかけ組織の当該制度撤廃に成功した〈語り〉、大学時代の語学の研鑽を継続してエビデンスをもって総合職転部に挑もうとする〈語り〉、そして、新たに生じた組織外部からの圧力に対応するという組織の危機を奇貨として一般職総合職の区別をその内側から不毛化・脱構築しようとする試みの〈語り〉などである。

3) 〈更新と再生産〉のセルフ・ナラティブ
ワークショップによって作成される SNEW (Self-Narrative Editing Worksheet) が完成されるに伴って、WS 前のインタビューで発話された〈語り〉の内容の一部が WS 後のインタビューにおいてインタビュー自身により完全に覆され否定されることが起きた。可視化されたセルフナラティブを後になって総覧することによって、いままで思い込んでいた自分の特定の経験に対して与えていた意味づけとは別様の意味付けを与えるべきであったと述懐が始まったのである。一言で言えば、本 WS を引き金として、キャリアイベントの気づきと〈語り直し〉が進んだのである。

4) 〈協働〉のセルフ・ナラティブ
20 人の〈語り〉で、必ずと言って良いほど言及されるのは他者との協調ワークについてである。フリーライダー問題で苦しむ続ける者もいれば、それをテコにして自己の待遇改善に乗り出そうとしている者もいた。大学での協調学習がどの程度役に立ったかという問いに対しては、20 人が異口同音にその直接の関連性を見出せないと答えたが、その応答とは裏腹に、大学時代の友人と未だに仕事の悩みを打ち明け続けている者が大半を占め、協働で仕事をするための〈語り〉には、大学卒業以来続く、他者との距離の取り方の苦闘が窺えた。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

2020 年 総合文化研究所紀要に研究成果を発表予定 (現在執筆中)

「キャリアパス形成過程における Self-Narrative Elicitation Approach」として、APCDJ に発表予定 (現在執筆中)